新體詩集

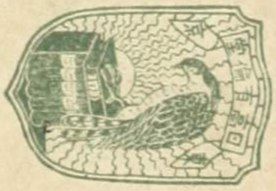
細越夏村著

笛靈

東京
日高有倫堂藏版

本間文庫
文庫 14
D 219

集
卒
點
公
日
五



文庫14
D219

序

予の詩を作るや、元より、主義の爲に非ず、風致の爲に非ず。唯、時ありて、われと故知らぬあこがれ心地を、胸に湧き立つ感想の堰きあへず、執りたる筆の端の動きに、れのづから成り行く文字の連れる跡こそ、此集を滿たせるものなれ。是或は詩に非らざるべし、是或は詩なるべし。そは偏に世の評家に任かす、又何ぞ關せんや。

予や、唯、わが歌ひし所の眞情、幽趣、或は、

奥秘、優婉の、世の惱める心を慰め、渇ける靈を潤すもの無きやを思ふ。これ、予が敢て、此粗雜なる一小冊子を公にする所因也。

明治三十九年一月下澣

下戸塚村の僑居にて

著者誌

目次

靈笛……一
花片……二三
沼の底……二八
みね子……三五
廢兵……三八
道しるべ……四三
あこがれて……四九
こまに……五二
愛……五四
沈默……五六

花　簪……五八
秋……六六
古　壺……七四
れもかげ……七八
いさり火……八〇
君こうは……八一
人へやる扇に……八三
幻　想……八五
黄金小筥……八七
金　鼓……八九
閉ぢよ早く……九四
愛の門より……九六
鏡ヶ浦雜詠……九七
紅文字……一一三
もだね……一一七
古井戸……一二一
春の日……一二八
霊　鐘……一三一

靈笛

細越夏村

靈笛

瑪瑙の臺滑らに、
琉璃瓔珞の天蓋
蘭麝の香泌む下、
琥珀の榻に身をよせて、

王は　戎衣　の　片袖を
脱ぎ　くつろげし　右の　手に
擧げし　夜光の　盃は
黄金　きらめく　美酒の
溢るゝ　ばかり、　美女
酌み　まゐらせど、　今宵は
得も　醉ひまさで、　霜れく
鬢の　白髮の　増　見ゐつ
千畳の　青玉殿
群臣　額を　垂れて、
死の　宮も　かくや　と　ばかり
寂寞の　領する　所、

明月　雲を　開けば
白光　さッと　迸つて、
野の　如き　床を　流れぬ。

折しも、妙の　笛の　音。
霧　ふくむ　氣を　波立たせ、
吊れば、雷神
雲を　蹴つて　風に　駈り、
沈めば　蒼龍
海底に　潜む　が　如く、
沈痛　悲壯　の　一曲
遠く　近く、神韻

漂として　搖曳す、
群雄　感　極まつて
聳やかす　鎧の　袖
相觸れて　殿上の
こゝ　かしこ　戛々の　音、
王侯　眉を　擧げて
「やよ、端近き　武士、
かの　笛の　主を　率て　來よ」
紅欄に　凭れる　若武者
君命を　畏みて
飛ぶ　が　如　階段　降る
間も　あれや　百尺の

鐵壁の　外を　駈ぬ。
程も　無く、燦爛の
王坐に　近く、若武者
ひれ伏して、御感の
恩言に　かしこむ　側
笈　負へる　白衣の
老行者　金剛杖を
突き　立てし　六尺の
大軀は　仁王　非ずば　不動、
胸を　蔽ふ　銀髯　長く
颯々と　風に　搖げり、

王侯　莞爾と　笑み　玉ひ、
「聖者よ、卿が　笛の　音は
何なれば、かは悲壯なる」
老仙　さながら　裂けたる　鐘の
音聲緩く、「明君よ、うは、
英雄　敵を　破つて、
屍丘　血河の　最中に、
無量の　感を　誘ふてふ
一曲の　古調なればぞ」
「英雄　敵を　破つてとや」
繰返し、又　繰返し、

沈吟に　俯向ける
王　慨然と　顏を　擧げ
「あゝ、敵破る　敵破る
英雄もがな、あゝ、
「聖者よ　聞かれよ、我
干戈を　交へて　七歲、
暴慢　非禮の　鄰邦、
何事ぞ、旗鼓　日に　盛んに
正を　助くる　神なきや、
戰ふ　毎の　我が　敗、
武勇に　古き　我國、
あゝ、父祖の　威稜を　奈何、

聖者よ　我、熟々
御相を　觀ずるに、
眉宇の間、靈氣、溢る、
願はくば、軍師　となつて、
三軍を　指使せずや。」

老仙　心地よげに
白衣の　肩を　高う
「あなかしこ、異常の
眼識の　程　れうろし
老餘の　痩軀、何物、
要れぼす　君にしあらば、

馬前に　斃るゝ　槃を　亨けん、
さらば。」とばかり　下す　笈の
扉　開けば、燃ゆる　緋の
直垂　伽羅の　香も　高う、
黄金　造の　軍配に、
吳孫、六韜三略の
淺黄錦の　卷の　物、
老仙　王を　顧みて、
「勝算　見ませ、茲に　在り、
敵の　運命、はゝゝゝ、
あな　笑止、あな　笑止」

「天に　謝す、はからずも、
此宵を、かくは　して、
聖者、否、維摩　の　師、
尊き　此　一人を
與へ　玉ひし　神慮を。」
王侯、諸手を　胸に、
仰向けし　額に　分れて
肩の　邊に　さやく　と
金冠の　瓔珞の
搖らぐ　音に、滿殿の
將士　思はず　手を　組み、
月　明き　空の　方へ

幾百の　瞳　据ゑたり、
老仙、笛を　把つて
聖盟の　曲　蕭々と、
行く　雲も　遏まれり。
王侯　我に　歸れば、
玉顏の麗しう
莞爾と　笑を　湛へて
「軍帥よ、願はくば、
此方へ」と　躬を　先
玉榻の　上より　起し
燦爛の　王衣を　曳いて、

廻廊の　幾うねり、
青石の　階　攀ぢて、
天主閣　百丈の
楼上に　仙者を　ひいて、
月光　漂渺の　彼方、
大江の　彼岸に　淡く
涯しなき　緑野を　指して
「軍帥よ、　軍勝たば、
「願はくば、　彼の　沃土を
静養の　地に　領されよ
薄謝　たゞ、
小國の　貧を　恥づ。」

江の岸　十里、
白蓮の　開く　音に
白鳥の　醒むる　朝あけ、
老仙は、　青毛の　駿馬を
階の　根に　寄せて、
緋總　垂る　納れし
金襴の　袋に　献じつ、
靈笛を　王に
「軍勝たば、　敵退かば、
うの刹那、　此　笛に
れいづの　音　妙ならむ

願はくば、是を　先づ
衰龍の　御襟に　秘めよ、
さらば、君、我　行かむ、
唯、王よ　笛の　音を、
夫れ、待ちませ」と
野山に　續く　三軍の
黒潮　次第に　遠く　小く。

こは　何の　瑞兆ぞ
夕榮の　光　長く
漂渺と　金色に
煙る　ろの　深みより

一條の　桂の　枝
空を　切り、虚に　鳴つて
玉殿の　床の　上に
颯と　落つる　間もあれ、
王が　胸なる　靈笛は
嘹朗と　おのづから、
妙曲の　いみじさや、
王侯は　歡喜の　餘、
跳び　あがり、てたどれば、
暮れ　かゝる　遙の　彼方、
山間を　雲の　如
歸り　來る　軍勢の

凱旋の　旌旗
翩翻と　勇しう。

幾千の　篝火
煌々と　相映じ、
夜を　知らぬ　明るさ、
百萬の　勇士
戎衣を　解いて、
戰勝の　盛宴に
歡樂　今や　闌、
老仙　襟を　正し
徐ろに　王に　云ふらく、

「老拙　天祐に　依りて、
幸に　軍に　勝ち、
敵勢は　將を　失ひ、
遠くも　潰い　去りぬ、
玆に　我務　終へたり、
願はくば、かの　美土を　得て、
閑雲夜鶴、
悠遊の　餘生を　亨けむ。」

君侯は　玉榻に　頽れ
醉眼を　怪しく　見張り、
からくと　冷笑ひ、

「こは、何を　老帥、
はゝ、こや、聖者よ、
耄せりな、呆せりな、
かの　沃野　ころ
我邦に　こよなき　寶庫、
財穀の　産
數を　知らず、
今　ゐを　卿に　呈せば、
はゝ、賢明の　聖者よ、
我國の　支持を　如何。」
語りも　終へず、王者は

昏眠の　鼾を　高く。
夜は　更けて　露　滿ちたり、
兵　散じ、篝火　消えて、
月　落ちし　闇の　城裡
蕭々の　松風に
聽けば　無常の　響あり。
老仙　天を　仰ぎ
浩嘆の　久しうて、
「豆大の　草野、何物、
はしたなき　小慾、
義を　捨て　恩を　忘る、

貪婪の　豎子、あゝ、
危いかな　此國、
さもあらばあれ、又
何ぞ　闘せんや、さらば、
雲水　悠々　の　中、
放浪の　懐をやらむか。

漠漠の　雲　暗く、
もの　寂びし　午すぎ、
老仙は　舊の　白衣に
笈　負ふて　飄々と
城を　出で、一葉の

扁舟を　江に　浮けて、
流水の　誘ふに　任せ、
恬淡として　去るを
將卒　悄として　岸邊に
老帥の　影を　惜みつ、
柳蔭に　並み　立ちて、
彌遠る　舟　慕ふ

折からに　一團の
奇火　熾に　燃ゐて
天より　落つと　見る　間に
對岸は　見渡す　限り
渦捲き　狂ふ　火の海

すさまじき　奔騰に
千頃の　綠野は
忽ち　洵る　無涯の
砂漠もや、かくと　計り
燒野原　とこしへに
磽确の　砂上
一草の　綠だも　無し。

花片

美の神、絕ず　刻々、
天上の　百花　盛りし
靈籠を　胸にして、
虛空を　舞ひつ、優手に
持ちあまる　花片を
人の　世　さして　投げ　行く。

血潮　薰る　聖き
若き　胸　のみにぞ、
投げられし　花片は

停まりて、其處に、
人の　身の　墓　被ぐまで
萎まずて、戀の
美しき　情思を　釀す。

世の　羈絆、寒風
――うば「利」より　吹く――
戀の　花　つんざく　と
習俗の　砂塵を　捲きつ、
健全と　幸福てふ
ねばけなき　名鎧ひて、
うが　樹つる「道」てふ　旗は
上下　こゝに　二千載
美き　若人が
斷腸の　血を　吸ひて、
利の　巷に　高う　はためく。

理と云ふか、律と云ふか、
利に　敏き　賢てふ　枯老
何時の　世よりか、敢て、
ほしいまゝに　規矩を　作り、
うが　頑き　「冷」きをもて、
天の賜與、自然の　快樂、
宇宙の詩　美の極致を、

測り　誣ゆる　さかしら。

うつし世、肉の動く　瞬時を
誇らしげなる　うの凱歌や、
むしろ、狗猫の　憍慢、
憫笑に　値せんや、
法よ、繩規よ、利得よ、
卿が　冷鋭の　刄は、
熱かき、軟かき
若人の　肌膚を
自らの　血をもて
碧黑に　塗り蔽はせぬ

あゝ、されど、相思の、
相抱の　靈精は、
天苑の　故郷に　再び、
燦爛の　花と　咲いて、
常春の　陽光に
漲り　燃る　薫香は、
見よ、山野　河海と　共に、
國亡ぶるも　君變るも、
地水の　續く　限り、
人畜の　相住む　極み
逼滿し、磅礴す。

沼の底

（一）

いづこより　落ちたりや、
わが　影と　相並みて
水の　上に　此の影、
花ならぬ、星ならぬ、
花よりも　美しき、
星よりも　まばゆき、
あゝ、妙の　此の影。

綠葉に　かこまれて、
世を　遠き　石に　倚り、
花野の　奥の　隱沼、
寂寞を　吸ふ　眞清水に
笑む　此の　影に　見とれつゝ
うつけ　心地に　春の　日は
霞に　昏れて　月煙る。

（二）

ろの　影の　ゆかしさに、

うの　水の　清けさに、
岸　近き　淺みに
いつしかも　降り立てば、
うの　影は　かなたに
うの　水は　いや清う。

うの　影の　ゆかしさに、
その　水の　清けさに、
溺るべき　人間の　身を
忘られて　いや行けば、
うの　影は　又も　かなたに、
うの　水は　いよゝ　清うて。

今は　つゆ　恐れも　あらず、
美し、かの、ゆかしの　影を
抱かむぞ　唯の　ねがひ、
あこがれて　追ひ　行けば、
かの　影は　いよゝ　ゆかしう、
その　水は　いよゝ　澄みたり。

(三)

あこがれて、うつたへに
追ひ行けば、かの影は

あなうれし、うこに　止りて、
はゝ笑は　我を　招ぐらし、
ひた走せに　波を　亂して
ひしと　かの　影を抱けば、
あゝ　いみじ、あな　くわし。

恍惚と、氣息せまる
我身を　緊く　抱きて、
かの影は　いよ〳〵　沖へ、
眞清水は　いよ〳〵　深う、
倏忽に　沈みしは
八千尋の　沼の底。

あゝ奇し、水の底に
人間の　身ながら、我は、
かの影と　からみし　まゝに
夢のごと　今も　生きたり。

おそろしや、思へば、
光　とゞかぬ　遠き　底の
こゝにしあるを、今又、
美しき　影に　ひかれて
軟泥を　沈みかけたり。

うつくしき、思へば、奇しき
この　影とだに　抱かば、
軟泥の　底にしも
あゝ　我は　死なで　在らむか。

みれ子

人の　御前に　俯向きて、
ほの　丹摺らふ　雨の　頬を
袂の　端に　埋めしより、
他に　憚る　苦艱を
寝られぬ　夜半に　髪嚙みて、
晨の　鬢の　ほつれ　勝ち、
夕　わびしらの　小鏡に
色　蒼褪めし　面　わかな。

十九を、ゆかしき　人に　病み
日毎、愁嘆に　細り行く
肩ゆ　淋しき　戀衣、
悶えて　ちぎる　袖口に
にじむは　紅か　唇の　血か、
情濃き　君が　熱き
涙の　玉の　滴りに
洗はるゝ　夜の　無かりせば、
生きて　悶えて　泣かむより
淵の　毒蛇の　餌たらまし。

弱き身の、世に　強ひられて、

遂に　汚れん　身なるもの、
茨を　抱く　おもひして
あだし　男に　添はんより、
法は　鎖を　卷かば　卷け、
道は　獣と　誣ひば　誣へ、
その　かみより、我が魂を
納め　まつりし　聖の宮——
君が　御胸に　額伏せて、
一夜の　春を　咲きて　散らなむ、

廢兵

夏月　白く、濃綠の
雜木林を　搖り起る
夜の　冷風に　洗はれて、
烟る　光の　薄綾を
軟らに　被せし　遠村の
社を　載する　青芝生。
村の　若者、五六人
日毎の　業に　筋張れる
銅色の　裸體にて

月良き　宵の　娛樂に
素人相撲の　眞最中。

月の　光の　接吻に
嬉し涙の　露浮けて
蘇り　笑む　夏花の
小徑を　分けて　怪げに
よろめき　出でし　人の影、
薄氣味　惡き　撞木杖
其れを　力に　よろ〳〵と
興じ　さゞめく　若人の
勇める　群に　近きぬ。

角力者等は　皆　駈け寄りて
片足人を　取り卷きつ
田舍濁聲　まち〳〵に、
「善うこそ　此所へ、　太郎兵衛、
三年前の　今頃は、
汝れこそ　村の　剛の者、
かなふ　者とて　無かりしが、
御國の　爲の　戰鬪に
今は　不具者の　身となりて、
再び　相撲　とる事も
出來なう　爲つた　不幸者、

なれども、其れも　國の爲、
あきらめやれよ、　太郎殿」
身こう　强けれ、　情には　脆き
百姓共は　涙聲。

折しも、風の　さと薫じ、
綺羅の　袂を　靡かせて、
蓮歩を　移す　美し女を
右の　腕に　擁しつゝ、
金鵄勳章、　從軍章、
參謀肩章、　旭日章、
胸狹き迄、　煌爛と

掛け　列ねたる　盛裝の
一將校は、ほろ醉ひて、
葉卷煙草の　烟青く
跡に殘して、悠々と
月野の　彼方、蒼茫の
銀波十里の　湖岸に
高く　聳ゆる　乳白の
洋館　さして　過ぎ行きにけり。

道しるべ

あはたゞし、狂ほしや、
この思ひ、たとはゞ、
夏の　日照の　最中を、
頽れたる　城跡の
煉瓦より　登る
陽炎に　類へんか。

頬の　落ち、肩の　瘠せ、
身の　細り、かくまで、

あゝ　此悶や　何、
人　若うして　痛まし、
行きて　迷ひ　求めて　得ず、
心　倦み、氣　疲れ、
精　盡きて　上睨む
眼の　窪み　凄じう。

君問ひますな、何なれば
さは　惱むやと、君、
若人よ、君が　眼には、
微けく、遠く　近く、
見ゐ隱れ、何となう、

唯　美しき　光なきや——
或時は　爛々の
焔　躍つて　眼を眩じ、
或時は　燃ゐ盡きし
燈心の　火の　明滅し。

かくて、天照る　春の光に、
花　かぐはしう　咲き出る　見て、
夜半、野の　涯の　森の　蔭に
欠けて　淋しき、暗き月の
落ち行くを　見て、故とてはなき、
さあれ、止め得ぬ　熱き涙の

せき來る　度の　堪ぬ　感想。

迷なり、迷なるべし、
惑なり、惑なるべし、
さあれ、世は、人は、識者は、
この　悶　根絶やす
明けき　理とて　持たず、

さらば、さらば、君去れ、
我ぞ　獨　泣かまし、
泣き　泣きて　涙の
盡くる日ゆ、或は、

ゐこに　倚りて　安らけくぞ
眠るべき　岩も　ありなむ。

こゝ　暗し、來し方　暗し、
行方も　同じ　暗がり、
さあれ、ゐは　眼の　誤りか、
非ずか、薄き光の、
あるが如、無きが如、
時折を、遙か　高きに、
遠くゆ　みゆる　嬉しさ。

かの光　燃る　丘に

得も着かで　途の　半ば、
斃るゝも　可し、うは、
運命なり、奈何せんや、
唯、我が墓を、願ふは、
輝きの　丘への
途の上に　在らしめよ、
うこに、我眠らん、
うこに、我瞑して、
後の代、若き　子等が、
此途　這る　折の
道しるべ　たらましところ。

あこがれて

あこがれて、雲と化り、
天の　氣に　溶かれて、
五月の　雨と　しよぼ〳〵、
千萬の　花にくだけて、
日に　映ゆる　玉とならまし。

あこがれて、風と化り、
うよ〳〵と、蔭ふかき
木の間を、流に沿ひて、

水草の　細葉に　堰かれ、
白花の　小きに　消まし。

あこがれて、　鳶と　化り、
秋の日　くらく　寂びたる
湖畔　頽れし　城の
古壁の　苔の　上へ　よぢて、
幽眠の　夢を　追はまし。

あこがれて、　雪と化り、
空に　つゞく　枯れ野を
寒風に　捲かれ〳〵て、

朽井戸の　暗き底に
音も無う　溶けて消えまし。

こまに

小さき　我友、雅び姿の
白木滑らに、鑿の香　かをる
キオリンの　美しこと。
氣の如き　四條の
かぼろ絃、たとはゞ、
乙女の　額を　流るゝ
ほづれ毛の　疎らなる
冠りて、臙脂の　黄に　匂ふ
ふくやかの　盤の　上に。

沈默よ、汝に　思ありげ、
漂ふ　絃の　殘り音　吸ひて、
來し方、三とせ、末はるかに、
れごろかや、幽なる　夢ぞ濃く。

愛

愛の　きざみし　胸なる　影、
愛の　授けし　胸の　おたゝみ。

うの　影は　花より　妙(たへ)に、
うの　熱は　火より　烈し。

うの　影は　胸の　大帝(おほぎみ)、
うの　熱は　胸の　うまし香(か)。

うの　影は　永久(とこしへ)に　消(け)ぬ、
うの　熱は　とはに　冷(ひ)ぬ。

沈默

人は　得知らぬ　惱みの
ひねもす　胸を　こめては、
組む手、悶ゑに　堪ゑずて、
慰藉と　繙く　聖經。

畏さに、たのづと　締まる唇、
沈默に　開く　心の　眼に
かすけく　映つる　尊き影。

信頼

岩は　動かぬ
しろ金の　塞ぞ　胸に　築ける

籠もれば　深き　城の　寮や
佳香に　煙り、金翅ゞ　舞ふ、
夢か、非ず、あこがれか、否。
昇り　澄みたる　氣根の
高うして、われと拜がむ　我が心かな。

花賣

朝な　朝な、
東空の　紅雲　分けて、
光　音なく　野を　渡る時、
山桃の　簇葉　冠りて、
螂蠋　咲く　小川に　添へる
葦小屋の　小さきより、
紅燈　透く　大理石の
やわらかく、あたゝかき
ろれかとも　思はるゝ

美し　娘子、なよやかに、
百花の　色香を　盛りし
籠さげて、城の塔
はの見ゆる　森かげの
市さして、賣らんとゞ　行く。

夕な　夕な、
薄紫の　靄に　卷かれて、
示導の　星　仰ぎつゝ、
夕禱の　鐘に　送られつゝ、
少女、默念の　相　氣高く、
感謝の　涙　見ゆる　歸途、

辻の　土橋に　地藏を　禮し、
一本　立てる　柏　めぐりて、
麥畑の　眞中を　逶迤る
芝徑を　靜かに　辿り、
古樫の　林の　奥の
れうろしき　獄屋　見舞ひて、
堅く　冷き　鐵格子より、——
籠に　殘りし　花を　皆がら、
束ねて　笑みて、ねもごろに、——
老い　さらばいし　囚人へ
慰藉と　惠むを　常とせりき。

若うして、憂の　遺恨に、
人を屠りし　罪　問はれて、
三十年あまり、暗黑と
寂寞に　胸の　憤炎は
埋み火の　燃ゆこころ　立たぬ、
執拗くも　熱せしが、
黄　桃　紫色、光薄く
獄屋の　鐵網　撫づる夕べ、
氷雨、鼠黑の　針刺す暮、
たゞがるゝ　頃とし　云へば、
うこに　聞く　やさしの　足音、
神々しかる　姿　よせて、

遣る　花束の　數積れば、
罪人、　花の色に、香に、
少女の　情の　やさしきに、
慚愧と　悔悟の　月は
怨恨の　叢雲　分けて、
夜な夜な、光冴ゑまさり、
眞如遍照、　本然の　性に　歸らぬ。

夕されば、老いし　罪人、
寂寞、　闇黑、　寒濕の
領ずる　獄屋の　窓に　倚りて、
夕靄に　とぼとぼと

昏れて　行く　淋しき　森の
下路を　遠くも　見やり、
「わが　若き　天使は」と
待ちあぐむ　心根ぞ
いぢらしく、いたましく。

霧白う　流れて、
無き程の　風　おりく
枯れ枝を　渡る　夕ぐれ、
囚人、　窓框に　絶りて、
殘んの　夕光　退いて　行く、
朽ち葉　布く　下徑　遠く、

眼を　走せて、「少女は」と、
夜の幕　厚く　落ちて、
我が足の　見ゑずなるまで
待ち　待てど、何故か、
花賣娘は　終に　來で、
初夜を　撞く　鐘の　音は
時雨にぞ　なりにける。

鶉鳴く　朝あけ、
秋　たけし　薄日
はかなげに、獄屋へ
這ひ　入りしの時、

老翁の　枯れし　形骸は
骨　既に　冷たく、
秋の　長夜　悶ゑて、
萎みにし　百花の
あたらしき、ふるき束
堆き　なかに　うもれて
美しき　死をぞ　遂げける。

秋

（一）

葉は　落ちぬ、
ひとひら、
又　ひとひら、
いかなる　深き　胸の
奥よりや、この　音（ね）——
秋風、
うす黒き　うめきや。

（二）

虫の　音（ね）よ、
かすかに、
ほそく、
又　かぼそく、
しらぶるは
何の　悲調（ひてう）ぞ、
その聲に、うの譜に
ふさふべき　詩やある。

（三）

更し　夜の　寂寞を
ゆるがせて、遙に、
江を　越えて、かなたの
林より　流るゝ　さや音——
笛の音よ、
絶えつ、つゞきつ、
あがりて　細く
沈みて　太く
聞くとなき　心を誘ふ

堪え難き　愁の調
切なりや、切なりや、
いつしかも　湧きし　涙の
はら〳〵と　古書の上

（四）

霏々と　小雨の、
枯野　十里を
蕭々と
煙る　あした、
朽杭に

尾羽擦り　切れて
縮める　鳥の
眼を　閉ぢて、
首　かたむけて、
地の　極み
つめたき　音の
かすけき　呻き
聞くに　堪へずや、
ろの　痛せし
胸の　毛を
ゆるがせて、
時しなう

鳴く　聲の　さびしち
ひゞきてや
ほろ〳〵と
今、菊散りぬ
北の窓。

（五）

闇を　登る　峠の
徑　盡くる　頂を
相挾む　深木立、
星一つ　青く　流れて

右を出で　左に入りぬ。

仰げば　圓き星空、
擧ぐる　手に　觸るゝ　れもひ、
夜を　寒き　秋風に
絃なして　さまよふ　雲を
奏でなば、聞ゐ
聞えぬ　微妙の
幽愁の　調や　いかに。

苔蒸せる　庚申塚の
古碑に　片肱　よせて

翼得し　あこがれ
西に　又　北に
はてし　無う　高く
涯なき　涯を
漂ふ　我の
魂よりや、非ずや、
うつゝなき　眼掠めて、
又、星の光　流れぬ。

古壺

鶏の　こゝと　鳴く　音に
ふと　醒めし　秋の里
暮　ちかき　日丹う、
流れ行く　百日紅の
幹に　背推して
抱けるは　白堊の
錆　青き　古壺
奇花　鬼の　夢の如、
糸金　赭く　寂びたる

蓋とれば、灰白に
乾枯れたる　頭蓋骨、
欠け　落ちし　疎らの
黄なる　歯を　ゆるがせて
ひゝと　其の　笑ひ聲
嘲みげの　音　寂びて
『死の領　こゝに、情の火
とはに　消え、血の香
肉の　あたゝみ、皮の色、
みながら　失せて、唯、
空と　枯と　冷と

相含む　不盡切、
こゝに　變らぬ　生命、
「時」と　からみてゆ行く。

こゝに　記憶なく、
こゝに　豫計なく、
こゝに　運命なし、
さあれ、
思はぬ　思、
見えぬ　色、
にほはぬ　香
響かぬ　音

あらゆる　もの〻　數々、
すべては一、一は總、
これを　眞と云ひ、
これを　法となす、
こゝに　美なく、
こゝに　善なし。』

おもかげ

見かへれば、おぼろ〳〵
はる〳〵と　昏き　來し方
「今」を流す　「時」の潮
千種の　彩に　織られて
うね〳〵と、唐錦
端なき　帶に　似たりや。
雜色　むら濃　くすめる　地に
金絲　銀絲の　きらめきか

まだらに　浮ぶ　人の　ふるわ
美し人の　優顏　さやかに。
悠々淀まず　「時」は　行けど
戀しき　面わの　濃うか　薄く
映らぬ　波こう　絕えて　なけれ。

いさり火

索漠、たとへば　夕の海の
暗澹、闇に　消え入る如く
模糊蒼茫の「生」の　潮に
見よや「愛」てふ　燃ゆる　漁火、
からむよ「情」の　玉藻　花草。

「生」の　苦海の　闇く、寒きに
光と　熱を　與ふるは「愛」
「生」の　苦海の　寂れ、荒びに
薫りと　色を　與ふるは「情」。

君こそは

いくうたび、あゝ、いくそたび、
れいんじの　光の　奥に
はろ〴〵と　百花　匂ふ
「生」の道　映しては、
光榮、幸福、安樂の
將來に　酔ひしれしめし
君こうは、あなかしこ、
靈術の　美き　法者。

いくそたび、あゝ、いくそたび、
地は　足の　下より　裂けて、
硫黄火の　焔　ゆら〳〵
青紫に　燃ゆる　尖毎、
水蛇の　八岐頸
血の　色の　鎌並めて、
生」と「死」の　國わかつ
煩悶、憂患、苦惱に
龍卷かせ、渦卷かしめし
君こそは、れそろしや、
靈術の　美き　法者。

人へやる扇に

心臟、情思に　裂けなば、
小扇の　形にや　咲くべき、
匂の、むらさき、淡紅、さふらん、
眞白、深紅や、色をな　問ひそ、
そは　時折の——
韻にこそや　薫れ。
眞夏、朝あけ、水の岸の
花に　玉置く　露を　掬ひて、

小扇　搖れよ、君、其御襟に
願ふは、天の氣　薫り　淡く、
雪布く　素絹の
御胸へぞ　泌めよところ。

幻想

白雲　ゆらぐ　靈音　聞きて、
蕗の　圓葉の　蔭に　めざめ、
夏の　日　きらゝと　白う　射返す
柿の　簇葉の　枝間を　拔けて
躍れば　蒼穹、いつしか　君と
抱いて　相飛ぶ　萬里の　かなた。

煌燿　五彩の　虹　まばゆく、
天路　半ばに　我れは　眼しひて

絶れば　戀人　膚　冷たうて
毒蛇の　錢鱗　連る　如し、
「怪しや」と　疑念さす　其刹那
血の波　燃ゑ立つ　淵に　落ちぬ。

「あな、我れ死しぬ」と　合掌靜坐、
專念、樂土を　額に　描けば、
秋風　をちこち、野に　月光　滿ちて
恍惚、行くとしもなう　辿り、
歩毎に　痛すると　胸を　探れば、
身は　枯葦一管　水に　添ひぬ。

黄金小筥

青實葡萄の　房　幾つら、
兩の　肩より　膝に　受けて
袖垣に　倚る　水の　ほとり。

うつけ心地の　背に　ものありて、
黑髪　まじはる　雪の　臂延べ、
やさしき　掌に、黄金造の、
紫濃藍の　總を　結へる
小筥を　からゝと　搖り薫らせて、

「君、こを懐かば　齢は　盡きじ」

倏忽、四邊は　淡紅の　靄こめ、
脚邊に　纖月　翠銀煙り、
白鴻、我をば　載せて　飛ぶに、
如意の　花片　雨の如く。

驕樂、狂じて、紐の　紫
ほどけば、靈香　薫ずる所、
身は　散り碎けて　無數の星火
深紅の　きらめき　天を　蔽ひぬ。

金鼓

橄欖色の　綾羅、
佳香　薄き
袂　三尺、
眞白手に
金鼓　捧げて
立てりな、妖女
嫣乎と　ばかり。

「打て」とや、「響の韻によつて

汝が性判せん」とや、うは奇なり、
好し、いざ、眞向に　正しうかざせ、
「あゝ」と　ひと聲、反指　うろへ、
打てば、何ごと、金鼓は　無うて、
妖女が　軟手の　掌ふかく
入るよと　思へば、五つの指に、
うと、熱、かう　握られてあり。

「れ、汝れ、無禮者、鼓は打たで、
奇怪、何物とぞ、我手を打つや、
やよ、又打ち見よ、此度こうは
外さず　最央を　見事に　打てや」

妖女、嘲笑の　色も　艶に、
緋總の　薫香を　振り　漂はせ、
兩手に　抱いて　胸の前に、
金鼓の　容量は　前に倍し。

「こたみぞ外さじ、あれ」とばかり、
掌かへして　強く　打てば、
又こは、何事、鼓は無うて、
我手は、妖女の　乳を探り、
双の　腕に　背を　捲かれて、
輕き　懷抱の　中にして　在り。

妖女、きりゝと　柳眉を　痙はせ、
「咄　たわれ男や、さは、何なれば、
この　猥行をば　敢て爲すや」
我体を　突き退け、せゝら笑ひて、
「いざ、打ち直せ」と　金髪搖つて、
こたみは　優頬の　ほとりに翳し、
金鼓は　又もや　容量を　増したり。

思はぬ　罪に　半ばは　狂ひ、
胸中　しどろに　振ふ　手あげて、
金鼓の　たゞなか　磕と　打てば、
何ぞと、我手は　頸を捲きて、

靈ずる　紅唇　ひしと　吸ふに、
妖女は　見る〳〵　毒蛇と　化りて、
冷き青鱗　迤逶　三丈餘、
十捲、二十捲、我れを　緊めて。

閉ぢよ、早く

忘れまほしき時に
消え失せむ　影ならば、
ものに　滿つべき　胸に
宿すべき　隙なからめや。

あゝ、否、待てよ、しばし、
そは　恐ろしき　客人、――
胸の　血を吸ふ　美しき　魔ぞ、
閉ぢよ、早く、胸の戸を、門守。

門守よ、汝が　名は「愛」、
ふとづるゝ　影　警むと
門守るに、汝れは餘りに弱きかな。

愛の門より

もの　忘れ易き　人間の
とこしへに　忘れ得ぬ
影か　深く　胸に　宿る。

「智」の　門を　くゞりて
入るものは、久しからず、
いつしかに、われのづから　消ゆ。
とこしへに　胸に　潜みて
人間ともに　墓さへ　被ぐ
ろの　影は　「愛」の　門より。

鏡ヶ浦雜詠

（一）

忘るべき　思ならば、
この波の　千尋の　底へ、
手すさびに　拾ひ上げたる
磯濱の　此の石と　共に捨てなむ。

忘るべき　思か、否か、
惑ひつゝ　わづらひつ、

腰掛けし　岩に　日暮れて
わが足は　見ねず　なりたり。

見渡せば　沖は　漁火、
星の如、群れて　光るを、
あゝ、わが胸は　夜の波、
黑く　搖るゝ音　絶ゆる間も無し。

（二）

砂濱に　書ける　此の字の、
白波に　洗はれ　去らば、

捨つるべき　此の　思ぞと、
はかな　占頼みて　見れば、
白波は　半ば　洗ひて
文字の　半ばは　殘りたり。

さらば、こは、半ば　忘れて
半ば　抱かむ　思なりや、
惑ひてぞ　此の夕も　亦
磯づたひ　さまよひ　行きつ
見かへれば　人なき　濱の
砂の上に　遠く　長く
わが　足あとぞ　亂れたる。

（三）

西ひがし　行きちがひたる
砂濱の　この足跡に
かの君が　殘したる
足跡も　交らひたらむ。

波近く　細う優しき
足跡は　君が其れか
たゝずみて　こゝにしも
海の美や　めでたりし
年月の　形なせる。

波の穗も　心ありて
うつくしき　此の足跡を
惜めるや　洗ひ去らで
さやかにぞ　そのまゝに　殘したるよ。

（四）

夕日かげ、八千色を、
波遠く、いろどるに
あこがれて　磯濱行けば、
岩の上に、かちと音たてゝ、

傷ましや、我が足に、
碎かれぬ　ちさき貝。

碎けたる　むらさきの
いくひらを　拾ひ上げ
たなゝこに　皆　載せて
思はずも　ひとしづく
落したり　此の涙。

あゝ、あはれなる　貝がら
碎かれて　ちり〳〵に
暴虐き　罪人の

手の上に　集せられつ、
恨み泣く　聲もせず、
みじろかず、つめたうて。

手を　搖れば　夕闇に
かち〳〵と　微かなる音
あゝ　いたまし、あゝ、すべなし、
碎かれし　汝が身を　見れば、
腸ぞ　ちぎるゝ　思ひ。

あゝ　潮よ、いかなれば、
此の　ちさき　貝がらを

かきのせて　運び上げしや、
汝れなくば、　この夕べ、
この　悲みの　なからましを、
さらば、汝れ、いたましき　幸なの貝よ。

汝が　敵の　手より　のがれて、
水底の　静けき　家に、
やすらかに　永久や　眠れ。

悲みに　なえし　足あげ
おもむろに　渚にたりて、
ひく潮に　のせやれば、

日は暮れて、うしろの山の
鐘楼より　いとも哀れに
鐘の音の　添ひて行きけり。

（五）

海底の　忍び得ぬ　思や
高じてや　噴せ　昇り
水の面を　破り　出でゝは
うれはしき　色を　盛りしか
夕雨の　海づら　遠く
眺むれば　島かげ　二つ

もだえげの　さまよ　いたまし。

とこしへの　沈默は　包む
とこしへの　つきぬ　わづらひ
舟にして　めぐりて　見れば
草も木も　なべて　憂ひぬ。

あゝ　汝は　大海洋の
わづらひの　凝りにし姿
われもまた「悶え」の　化身
島がねよ、ゆるせ、もゝとせ
松が枝に　小舟　つなぎて

こゝにしも　愁ひの　詩を
つゞりてゞ　死なましところ。

（六）

月の海、霭淡う、
波　和ぎて　空を　溶き、
沖　遠く　續く　漁火
金色に　ちさう　燃ゆ。

岩ほ　打つ　波の音　重う
夜を　領ずる　沈默叫び、

水天、色を一に
渺として　相和せり。

銀光は　空の星
金光は　海の星
燦たりや　爛たりや
相映じ　相飾る。

空も海、海も空、
いづこまで　海なりや
いづこより　空なりや
渺として　極みなし。

岸打ちて　返る　潮に、
乘りて　今　想像は　馳せぬ
いや遠く、島が根　越えて
迷ひ入る　漂渺の中。

飛び行けど、流れ行けど
果しなき　宙　はろ〴〵
想像の　翼　疲れはて、
いづらへか、又　歸り來ず。

（七）

立巖に　背　もたせて、

薄草履　砂に　埋めつ、
人の無き　磯濱の
眞晝をば　我れ獨り
あこがれつ　呆けて立てり。

ひとしきり　打ち寄せて
足洗ふ　白波に
ひかれ　來て　かろやけく
わが　脛に　纏ひたる——
と見れば——　綠さやかの
若藻草　莖細う。

手に執れば、　なよやかに
撓みたる　いたいけさ、
さからひそ、　なびけよと
やさしうも　ゆらゝくと
造られし　汝れなりや。

あゝ好し　美し　玉藻よ、
地にしては　若柳
しだり枝の　なよゝくと
溫風に　輕く舞ふ
やさ姿、　汝れは　汝が姉。

ゆかしかる　姉妹や、
優の、「美」の　表章とゞ
祝福はれて、　地に、　水に
觀る人よ　かゝれとゞ
「平和」の姿　裝ふや。

優しきに　をたけびて
悔ひ耻ぢぬ　者ありや、
あゝ　「優」や　「美」や　「仙脫」や
ろは　敗れざる　陣にこそ――
爭はざるに　勝つ者やある。

紅文字

指　五つ　開けば、
手の掌に、　こは奇し、
細文字の　なよ〳〵と
書かれたり、　紅もて。

こは、　全く　知らぬ　筆ぶり、
得解かぬ　意味の　由ゞありげ、
唯見る　四の　優假名、
詞とも　思はへず。

小琴　枕に、いつしか、
まどろみし間を、こは誰が
戯書か、山蔭の
一つ家の　椽にして。

惑へば　荒し　草庭、
ろことなら、得ならぬ薫香、
あこがれて、何時しか、
葉を吸ひつ　立てる　木の蔭。

のうせんかつら、はびこり、
蔽ひし下の　眞清水

覗けば、美し、我が影、
白百合の　楚々として、

疑は、謎は　解けたり、
手の文字の　意味は　解けたり、
辱な、我も亦
れもはれの　幸人か

と見れば、淡紅の花片、
野に山に、見渡す限り、
空塡めて、上に下に、
散り　まよふ　盛觀や。

四邊鎖す　薫香に
甘く痛む　心、臓よ、
躍る血に　五體は　痲痺れ、
骨溶くる　現無さ。

聲有り、何處よりか、
耳に入りし　かしこ音、
暖かき　うつけ心地
消ゑ失せて　れのゝく
手の掌に　文字とては無し。

もだえ

「愁ある胸を、さらば、
眼を閉ぢて、人の長き
双の腕に　任せんか。」

日は　低き　草原、
ひとつ木の　杉の影
落ちて黒く、江のほとり、
風に　搖るゝ　見つめつ、
散れ殘る　社の跡の
礎に　腰を　れろして、

夢のごと、我は思ひぬ。

「ゆかしき面わ、深く、
底に薫る胸を、さらば、
眼を閉ぢて、人の軟き
白き腕に　任せんか。」

眞晝、日さらゝ、
陽炎　かをり
緋牡丹　惱む
階の　上、
檜扉に　肩倚せて、
うつら〳〵、我は思ひぬ。

「得こう見ぬ、高き
いづこにか　在るべき
ものを　追ひ求めて
休まぬ　翼
はらたく胸を、さらば、
眼を閉ぢて、人の血の
熱き腕に　任せんか。」

夜半、高殿の
銀の　欄干ゆ、
振る丈の　素絹の袖に
星坐を　搖つて、

驚く　火光の
動亂の　裡に、
狂はしう、我は思ひぬ。

古井戸

森古りし　丘の　裾を、
水黑き　流に　添ひて、
霧薄き　夕を　獨り、
うら若き　尼の　行く。

墨染の　袖に　寂びし
身は、　肩は、　勤業の
朝夕に　細りたれ、
しかすがに　染め殘る、

微かにも、頬の血や。

落葉吹く　秋風に
送られて　たゞ〳〵と、
枯れ楢の　斜丘を　過り
蔦丹き　藪蔭に
飜る袖　見ゑ隠れ。

茶の木並、繁く、疎らに、
相はさむ　小徑の　半ば、
とゞまりし　尼が　眼は
醉へるごと、側なる

柚子の實の　黄なるに落ちぬ、
あゝ、こゝろ、小菊散らしの
紫の　振袖の
小春の　一日、
繪日傘を　傾けて、
行き摺の　若人を
見初てし　初戀の跡。

一叢　薄　尾花　老て、
行く風も　心置きげの
徑折れて、松の葉　赧く
散り布ける　芝生の

方丈が程　黄ばめるに
尼が　頬は　忽ち
紅を　かつ潮し、
昔　蔦たき　色香の
匂ひ出し　こゝころ
月薄き　夜な夜な
かの君と　契りてし　小野。

女郎花　折れたる
枯れ藪に　杜絶ゑ〳〵の
石あらき　道の果、
八重葎　半ば　蔽ひし

古井戸に　夜は落ちて、
ろよ渡る　風にかのゝく
尼が　唇　色なう、
わなゝく　諸手を　胸に、
もの怖の　眼を　閉ぢぬ、
あゝ、此處ぞ、星飛し
眞夏の　一夜
小雨に　更し頃を、
世は罪と　誣ひ責むる
みうか子を、狂じてや、
搔き悶ふ　手より　投し井。

れうろしき昔　歴々、
額繞る　焔とゞろ、
痛恨　恐怖、手にく
良心の　利鎌揮ひて
記憶を　八千裂の
苦痛に　疲れ果て、
力なき　瘠し身を
古杉の　幹に　倚せてし
尼が眼の　明きしともなう
落ち行きし　井の底の
朽水に、いつしか出し
月影の暗く　細きに、

何の魔ぞ、尼は　誘かれて
一足、三足　よろめく
間もあれや、井の椽の
土は崩れて、永劫、
光とゞかぬ　眞底に
人知らぬ　骨と朽ちけり。

春の日

（一）

春雨の　黄昏や、
蛇の目傘　細めに　閉ぢて、
散りかゝる　花の堤を
なよ姿　すらりと　細う、
水色の　振の袖
ろよ風に　靡きたり。

疎らに　注ぐ　春雨
優しうも　心ありてや、
蛇の傘　深ませて
傘の内　しのばしむ。

（二）

一つづゝ　はら〳〵と
落ちて來る　軒の雫を
悲しうて　我が泣く　折の
涙にぞ　たくらべつ、
窓に依り、うと〳〵と

春雨の　小半日は
淋しうも　暮てけり。

（三）

人と樂しむ　人なれば
恨も人に　深き人、
あゝ君も人、我も人、
君、我　笑み、我を忌み、
我、君と笑み、君を忌む、
花あればこそ、春の日は
恨み恨まれ、笑み笑まれ、
けふも　夕べと　なりにけり。

靈鐘

天上の花や　碎けし、
ふと　胸に　響きたる
うの音する　鐘鑄んと、
技工に凝り、念じ惱みて、
うら若き　鐘匠
痛ましう　頬れちぬ。

紫の　焰を　捲いて、
深紅　燃え立つ　熔鑛に、

幾う夜半、精や籠めけむ、
滿願の、靜き早晨
冷え成りし　鐘の　いみじさ、
あなかしこ、望滿てたり。

雨細き　里居の　獨、
倦じては　撞木把る夕、
妙の音の　心に泌みて、
我ながら、うら恐ろしう、
青星の　覗く　破壁、
薄闇の　もの凄きかな。

迷ひ行く　奇魂や、ふと、
感じても　潜みしものか、
見るからに　齋し此鐘、
岩白き　後の崖に
月落つる　宮の朝あけ、
金色の　梁に　吊られぬ。

若草の香を、からみ立つ
陽炎の　攀づる　夏の日
霧黑う　波打つ夕べ、
森越えて、丘を滑りて、
奇しき音を　漲ぎらすにか、

霊鐘は　日毎名を得ぬ。

幾度か　星は　移りて、
騒ぎ初めし　世の果、
旗鼓おどろ　颶を　捲きて、
雲拂ふ　紅焔の底、
兇蠻、鐘を　掠めて、
一村　遠く　唯　灰。

時を食む　黒潮荒く、
鐘匠　搖られ〳〵て、
つくも髪　霜おけば、

「今生の　名殘を　せめて、
我鐘に　一目　惜まむ。」
憐れなる　老の願や。

くづ折れし　秋の末花
夕風に　さいなまれつゝ、
薄き日の　光　慕ひて、
瘠し地を這ひ　惱む如
うらぶれて、老いさらぼひて、
わが鐘を　尋ねつゝ、
迷ひ行く　山の北、川の西。

行く春の花　散る夕江、
靄の遠、薄るゝ音追ひ、
漕ぎまどふ　枯れし腕に
力つき　流るゝ　小舟
緩く速く、　波のまに〳〵、
いづこよりか、又も微かに
懷かしや、わが鑄てし
鐘の音は　絶えつ、續きつ。

霊　笛　終

明治三十九年二月九日印刷
明治三十九年二月十二日發行

霊笛
定價金參拾錢
郵税金四錢

著者　東京府豐多摩郡下戸塚六百二十六番地　細越省一
發行者　東京市本郷區千駄木林町百九十六番地　日高藤兵衛
印刷者　東京市神田區美土代町四丁目五番地　江澤三郎
印刷所　東京市神田區末廣町三十五番地　江澤印刷所
發行所　東京市本郷區千駄木林町百九十六番地　日高有倫堂

不許複製

大賣捌

東京市京橋區尾張町　警醒社
東京神田區表神保町　東京堂
東京神田區裏神保町　上田屋
東京日本橋區箔屋町　前川
東京京橋區南傳馬町　目黑書店
東京日本橋區通三丁目　林平次郎
東京神田區表神保町　修學堂
東京日本橋區吳服町　北隆館
大阪心齋橋南久太郎町　福音社
大阪南本町座摩ノ前　杉本書店
大阪備後町四丁目　吉岡平助
京都三條寺町　聖書房
京都二條寺町　若林書店
神戸北長狹通　福音舍
甲府市柳町壹丁目　大塚柳正堂
水戸泉町　川又銀藏
野州足利町一丁目　青木書店
廣島市　積善館
岡山市岡山町　奧田金昌堂
周防國岩國町　白銀日新堂
山口大市町　同支店
高知市種崎町　澤本書店
熊本市新町二丁目　長崎次郎
鹿兒島市松山通リ仲町　好文堂
久永金光堂

筑後久留米市　菊竹書店
靜岡市　吉見書店
横濱市　第一有隣堂
同　弘集堂
同　勉强堂
盛岡市肴町　弘文堂
同　佐々木仙助
前橋市曲輪町　煥乎堂書店
越後國水原　西村六平
新潟古町　西村支店
越後長岡　覺張次平
金澤市片町　宇都宮書店
高岡市守山町　學海堂書店
福井市佐桂枝中町　品川書店
信州長野市大門町　西澤喜太郎
信州松本本市　松榮堂
信州諏訪町　日進堂
仙臺市新傳馬町　紀港堂
仙臺市東二番町　鈴木書店
仙臺市大町五丁目　藤崎書店
陸中一ノ關町　佐藤喜年
陸奧弘前市土手町　今泉道太郎
青森市米町　同支店
秋田市茶町　成見清兵衛
北海道札幌區南一條西二丁目　富貴堂

明治三十九年二月十日印刷
新刊發行の都度增補訂正す

有倫堂出版書目

東京市本郷區千駄木、林町百九十六番地
日高有倫堂

川上眉山著○鏑木清方畫

近刊

小説 **觀音岩**

（上製美本）

定價 金七拾五錢

郵税 金拾五錢

同情豐富　文致清艶

思想高逸　裝釘美麗

これ本書の特色也

（近刊豫告）

綱島梁川譯

ルナン耶蘇傳

（上製美本）

定價金一圓五十錢

郵税金十五錢

耶蘇は人類の王也。ルナン其傳を結びて曰く「其教は永へに新なるべく其物語は氣高き眼に涙を溢れしめ其苦みは優しき心を動すべし、世々の後まで人類の中曾て耶蘇より偉いなる者生れずと語り傳へなむ」と。此書救主の生涯、其懷しき神の國の思想、天父の觀念を叙べ、奇跡を論じ、他の宗教との關係を明にし、其國家觀、社會主義觀また此間に瞰見す。自由討究の精神一貫して批評の鋒刃觸れざる所なく、之がため一時歐米基督教界を震動して顏色を失はしめたりと雖、世界史上に於ける耶蘇の位置は寧ろ之によりて確められたりと言ふべきなり。梁川先生は絢爛瑰麗、現代獨歩の筆を以て此書を譯して世に問はる。世界の認めて耶蘇傳の白眉となすものと摸範的美文とは之によりて吾邦文壇に供へられむとする也。

泉鏡花著　鏑木清方畫

再版

小説 **誓之卷**

（上製總クロース美本）

定價七十五錢

郵税金十錢

これ鏡花先生があふるゝばかりの同情を以て、天と地と人に訴へて同情を求めたる、初戀の詩篇也

新刊

小説 **不問語**

（上製總クロース美本）

定價七十五錢

郵税金十錢

竹裏の蟾蜍地仙と化して氣を吐くと虹の如く、籔中の彌二郎壳鐵砲を發して僅に雀を驚かす、しかれども其光り天に冲り、其響き地を動かす、これ著者の手腕にあらずして其の不問語なり

饗庭篁村著

近刊

小説 **山懷**

（上製總クロース美本）

定價七十五錢

郵税金十錢

山水淺深、人情厚薄、溫泉氣蒸して土地暖かく、貧富心をかへす情義うるはし、花あり、實あり、涙あり血あり、一讀その情趣を掬すべし

饗庭篁村著

近刊

小説 **虛空塵**

（上製總クロース美本）

定價七十錢

郵税金十錢

塵積つて山となれば山は碎けて一陣の風に吹飛ぶべし、飛びてまた積りて山となる其の戀の山欲の山、山又山に踏み迷ふ者のよき道しるべは是れなるべし

再版

我が文章

大町桂月著

定價四拾八錢
郵税金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縱横自在眞情流露し行く處に行き止る處に止まり些の街ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り洒落飄逸快闊にして男性的意氣を發揮し而かも言外に情熱溢る文此に至れば聖なり先生の文の如きは、實に當代の逸品なり

新刊

紀行文集 山水寫生

文學士 久保天隨著

定價四拾五錢
郵税金六錢

天隨氏の紀行文は、世すでに定評あり。泰華を眼前に仰ぎ、溟渤を脚底に湧かしむるもの、これ其文の特色にして、決して、他人の摸倣を容れざるものとす。本書收むる所は、長短無慮二十餘篇、その地を以てすれば、南鬼界の天に臨み、北蝦夷の境を踏み、實に著者帳中の秘たるものなり。造化の工を讃賞し、天地の美を景仰するもの、机上この書なかるべからず。

新刊

小說 花たば

徳田秋聲著

定價四拾五錢
郵税金六錢

此に美しく束ねられたる花の數は何々ぞ。紅白紫黄必しも剪綵の妙を悉さゞれども、清き自然の野趣は此の一束に盡きたり。全篇長短合せて十三章、總て作者獨擅の詩材にして、亦獨得の文字なり。秋聲子が眞技倆と抱負を窺はむには、此篇を措て他に求むべからず。切に江湖の眞摯なる讀者の高覽を希望す。

文學士 小原無絃譯

新刊

原文對照 シェレーの詩

定價參拾五錢
郵税金四錢

シェレーは一個の豫言者なり抒情詩人の醇なる者なり其詩を作爲するや神興の白熱を以てす光焰萬丈生氣辭句に溢る眞個天馬空を奔るが如し無絃子其詩を心讀する多年今や彩筆を揮つて之を我が詩型に譯する原詩の眞髓を傳へて遺憾なく朗々として眞に高誦するに足る乞ふ詩神の寵兒たる者一卷を抱いて詩腸を肥せ。

文學士 大町桂月先生選評
日高有倫堂編輯部編纂

近刊

明治大家文集

定價金七十錢
郵税金拾錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず文星森列著作の多きと汗牛充棟も啻ならず今一々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易のことにあらずこの書正確なる批評眼を以て明治三十八年の間論文といはず美文といはず小說といはず苟も文章を以て一家をなし特色を有せる文豪數十名を撰びまた其名文豪の特色を發揮せる名篇を選び添ふるに桂月先生の詳細なる批評を以てす明治文章家中の眞の文章家は集つて此の書にあり眞に之れ明治文學の縮圖にして一讀の下以て明治の諸大家の面影を伺ふべく文壇の一大偉觀たるを失はず文を學ぶ人にありては以て眞の摸範とするに足る有益にして且つ興味ある良書也

新刊

獨詩 野葡萄

秋元蘆風譯

定價參拾五錢
郵税金六錢

○原文對照○卷末に評註を附す○收むる處、詩、數十篇、汎く、獨逸詩人の傑作中、主として、叙情的逸品を採つて、之を邦韻に飜したるもの、原詩の對照と、卷末の評註とは、又以て、獨逸詩人の面影を窺ふと同時に、獨詩研讀の一助たるを得んか、請ふ、庭園の花に醉ふるものは、來つて、野邊の果實を味へ。

文學士 小原無絃譯

新刊

原文對照 バーンスの詩

定價參拾錢
郵税金四錢

文學に平等主義を持して革命思想を鼓吹せし者は實にバーンスを以て古今東西隨一と爲す其詩や古法舊格を脱して天眞扑直なる精神を現じ最も創新を以て勝る今や無絃子の靈管に依て譯成り多感多情にして功名心燃ゆる如き若き田園詩人の面目髣髴として其一卷に溢る滿天下の才子佳人幸に愛讀の榮を吝しむ勿れ

近刊

代表日本人

大町桂月著

定價四拾五錢
郵税金六錢

日本人を化せしは區々たる教義にあらずして事實也歴史也國體也祖先の發揮せる國民性也我が國には儒教佛教以外一種の武士道ありて今日の發展を致したる事今更言を待たざる所なるが武士道の眞相を知らむとせば理論のみにては不十分也之を人物事實に徴せざるべからず此書日本國民の特性の何たるかを説き建國以來その特性を發揮せる人を擇びて其面目を描き日本國民の前路に光明を與へ教訓を與ふ一風變はれる日本國民の歴史也兼ねて道德經也。

再版

時代青年文集

大町桂月先生選

定價四十錢
郵税金六錢

世に活氣あり情熱あり純潔玉の如きは青年にして青年は實に時代の花也火也當代の文豪桂月先生最も青年を愛し指導教訓須臾も懈らず爰に滿天下青年諸子の傑作數千篇中より其尤なる者を拔き嚴正なる批評を加へて時代青年文集一卷を編せらるる收むる所叙事抒情あり論説書簡あり將た新體詩あり咸な絢爛花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を醫すべく元氣を鼓舞すべし附錄には文壇の一大疑問たる夏目先生の「一夜」を始め當代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

東宮侍講　本居豐穎先生著

近刊

標註紫文摘英

定價四十錢
郵税八錢

源氏物語が千古の大文學たるは今更贅言を要せず而も之を教科書に使用せむには除り に浩瀚に過ぎ又事實に悖倫非德の箇處多く 女子教育家の齊しく遺憾とするところ源氏 博士の稱ある本居先生大に之れを慨し五十 四帖を通じて其の英を摘み蕪を去り最も聯 絡と校訂に意を用ひ「紫文摘英」一卷を編せ ら る即ち是れ源語全篇の縮圖にして一讀其 大意を窺ふ併も紫文の妙は此一卷に盡くせ り各種女學校の良教科書たるは勿論苟くも 國文學に志あるの士女は必ず一本を備へざ るべからず乞ふ高讀の榮を給へ

帝國大學教授　夏目先生序
上田先生
ロイド先生　文
チャールスラム原著
文學士　小松武治譯

近刊

續沙翁物語集

定價七拾錢
郵税金八錢

譯者曩日沙翁物語十篇を公にして世間の好評を博し期中ならずして第六版を重ぬるに至れり今又更らに自餘の十篇を譯集して續沙翁物語集を篇す各篇悉く名什譯筆例によりて明快加ふるに細密なる註解を施して讀者の便益を計れり

文學士　久保天隨著

近刊

文壇獅子吼

定價參拾五錢
郵税六錢

博大精該の才識を以て、不偏不黨、文壇の趨勢を論斷し、毫も顧慮するところなきは、評論家としての著者の態度なり、その問題は、文學・史學・宗教・道德の諸方面に亘り、虬龍の片甲、なほ能く雲を成す。一卷收むるところ、凡そ七八十篇、長短錯落、理致あり、情趣あり、眞個人間稀に見るの好文字。

文學士　久保天隨著

再版

美文韻文　夕紅葉

定價三拾五錢
郵税金六錢

著者の美文は、潑墨の山水の如く、氣韻生動、豪宕の氣、筆端を繞り、かの蝶葉を歌ふ底の軟弱文字に非ず。三生石、高遠城の如き、事すでに奇に、文亦た雋、人をして、覺えず、起舞せしむ。韻文には、抜山歐の歌、蒙古の大英雄を謳歌し、一唱寃鳴壯大雄濶、大空を横絶するに似たり肉躍る。唯だ本書に於て之を覩るべし。

細越夏村著

新刊

靈笛

定價金參拾錢
郵税金四錢

日光暉々の野を、深き水の行くを見ずや。水面は煌爛として、金波銀波何ぞ燦々の極みなる。然れども、想へ、十尋の底、油々こし て遲行する流れの何ぞ夫れ幽冥なるや。斯の如きは、詩人夏村の胸腔に澎湃する詩 想の汪流なり。上行く波を掬ふ者は、清麗の水色に、耳目を洗ふ可く、芳草岸頭、靜坐して、深底の音に心を澄ます者は、水波自然の「靈笛」の奥秘なる幽韻を聽かむ。

姉崎博士序　萬朝報記者茅原華山著

改冊五版

向上の一路

定價參十錢　郵稅六錢

向上の一路に就かんと欲する者は此書を讀め我國に於て哲學的に社會主義を建設したるは此書を始めとす▲安部氏の駁論及著者の駁々論は益々新社會主義の本領を發揮し共に光彩陸讀たり▲近時の一大著述にして情理該ね臻る者は此書なり敢て江湖の讀書子に勸む

大町桂月先生　中内蝶二先生合著

六版

少女と山水

定價參拾五錢　郵稅金六錢

人生の美凝つて少女に在り自然の美凝つて山水にあり山水の美や豪宕にして瀟洒少女の美や優婉にして可憐蝶二君の艶麗の文少女の嬌態を描きて筆底に脂粉の氣あり桂月君の洒脱の文山水の幽趣を寫して雲煙紙表に浮動す双々相對して作者各得意の筆致を縱にし高尚優雅家庭の讀物ともすべく文章の手本ともすべし腥風血雨に惱めるる軍國の讀者諸賢幸にこの清麗の文字に接して宇宙の美を味ひ給ふべき也

文學士　大町桂月著

七版

わが筆

定價四拾五錢　郵稅六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり覇氣あり或は洒脱に或は沈痛に或は眞面目に或は詼諧に短くして寸鐵人を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆を以てす家庭學校社會及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情掬すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の快文字也

大町桂月先生序　角金潮聲著

参版

宇宙と人生

定價貳拾五錢　郵稅金四錢

宇宙と人生の問題豈常人の言ひ易き所ならんや茲に哲學者あり宇宙の幽を闡き玄を究め森羅萬象の生滅變化の本源に溯りて人生の眞諦を内觀直視せんとす玆に詩人あり天地の美に動き眞に肉薄して以て人生の本義を直觀捕捉せんとす本書は哲學者の想と詩人の情を文に綴りしもの古高の韻、艶麗の致、讀者をして三嘆せしむ宇宙と人生とを謳はんとする者は來りて本書を繙け。

山口先生序　シルレル原著　齋木仙醉譯

新刊

接神術

定價貳拾貳錢　郵稅金四錢

天師と稱して大聖伏羲の古道を唱導する著者が、詩人シルレルの雪の如く皓く月の如く幽に、花の如く艶なる、理想の一卷、接神術一名神智學なるものを譯して、聖靈は神母なりとの大論斷を試む、確かに思想界に大波瀾を起すべき著、殊に世界の百大詩人の母心を讃美せる百人一首を附錄として東郷大將母堂に捧ぐ、苟くも文藝に志ある士女は之を讀まざるべからず

文學士　大町桂月先生書翰
文學士　上田敏先生書翰
木村鷹太郎先生書翰
岩野泡鳴著

新體詩集

夕潮

定價參拾五錢　郵稅六錢

著者の詩冥遠幽邃、深く多大の情熱を藏して、うちに無窮の悲觀を備ふ而してその行文自在の調、激して豪健奇拔の想を搆へ、沈んでまた可憐の情を寄す、海に向つて、苟も久遠の感慨あるものは來つて、この冥想的詩人の「ゆふ潮」を一讀せられよ、

海老名彈正先生著

宗教々育觀

定價五拾五錢　郵稅八錢

宗教界の明星として名聲天下に轟ける海老名先生は本書に於て教育問題に關する所信を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動するに足るものあるや必せり見よ先生が該博の識公明の論一讀人をして快刀思想界の亂麻を截つの感あらしむ而かも本書の内容は單に教育問題に限らず廣く宗教の根本義に對する先生最近の思想を發表せられたるも實に濛々たる我邦思想界に於ける一大探海燈たるや疑を容れず大方の識者請ふ刮目して本書の光焰に接せよ

匿名隱士著

七版

破天人論

定價參拾錢　郵稅四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人生觀とを鼓吹したる壯快の書也本書の出づるや全國各新聞雜誌の大好評を博せり出版日尚淺きに不拘既に六版を印刷せり以て本書が如何に愛讀せらるゝかを知るべし

再版

梁川文集

綱島梁川著

上製總クロース　頁數約千頁頗美本

定價金貳圓廿五錢
郵税金拾五錢

梁川綱島先生、其高邁博大の識、精嚴理到の言、恰も燭を把つて照すが如し、されど先生は談理是れ能とする學究に非ず一面冷靜細緻の頭腦を備へたる倫理學者にして他面別に抑ふ可らざる詩人の熱情を宿して天他を戀ひ此戀を湛へて日夜に瞑想し旦暮に修養止まざる哲人也解脫の人也、理を談ずれば簡淨にして靈活、感興を遣れば深邃にして豐麗、其想獨特、其文獨特、鬱然一家を成して現代思想界の一角に拔く可らざる自家の領を占めて妄に他人の追從するを許さず、是れ筆に非ずして人格なれば也、弊堂幸に玉稿を請うて上梓するの榮を得たり敢て先生の高風を慕ふ所の諸君子に薦む。

山口先生題詩　蘆風秋元喜久雄譯

訂正四版

獨逸詩粹　## 紛紅集

美術的製本
定價廿五錢
郵税四錢

ゲーテ、シルレル、ケルチル等獨逸の七大詩人が金玉の佳什を選び、之を流麗精眞なる筆を以て、飜譯したるもの、一字一句の細と雖ども、悉く原詩の美を顯はして遺さず。收むる所、清美なるあり、優婉なるあり、風雅なるあり、艶麗なるあり、例へば飛紅紛々として、蓊勃たる香氣、人をして醉はしむるが如きもの集つて皆此中に在り、別に原詩を添へ對照に便す。

萬朝報記者　茅原華山編纂

青年と詩吟

定價貳拾五錢
郵税四錢

人生豈思詩情なかるべけんや『青年と詩吟』は茅原華山氏が各諸先生に囑して各々其愛誦さるゝ漢詩、和歌、新體詩、俳句を撰び編纂せられたるの書日夕此卷を抱て諷誦せば其品性を修養し其志氣を砥礪するの功蓋し計るべからざるものなり

文科大學講師　夏目先生校閲　上田先生序文　ロイド先生　チャールス、ラム著　文學士　小松武治譯

訂正六版

標註　## 沙翁物語集　正編

定價七十錢
郵税十錢

●上製クロース四百頁頗る美本

古英雄亞歷山陣中に在りて常にホーマーを誦し那破倫大帝兵馬の間、手、ゲーテを繙かざることなかりしと聞く戰勝國民豈に文界の巨壁シエークスピーアを讀むの餘裕なくして可ならんや本書は沙翁戲曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ジユリエット及冬物語等通じて十編の物語を拔萃し精緻なる飜譯を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附錄を以てす。特に文科大學講師先生の校閲を仰ぎたる者にして苟も沙翁戲曲の何たるを窺はんと欲するの士は須らく一本を購うて座右に備ふべきの書也

岩野泡鳴著

新體詩集　## 悲戀悲歌

定價參拾五錢
郵税金四錢

著者の詩既に世に定評あり、その久遠無窮の悲觀、常に高遠幽邃なる冥想を經て、廣く人間界の煩悶を靈化す、蓋しこれ時代の詩界に獨得の地歩を占むるもの、而して「想の詩人」「海の詩人」今やまた「人間界の詩人」と呼ばんとす、向上か墮落か、乞ふ、この『悲戀悲歌』を見て、之を判し給はんことを

高橋五郎著

杜伯品藻

定價廿五錢
郵税六錢

トルストイ伯の主義人物を評す
一言一行一動一靜天下の毀譽賛斥を招致すトルストイ伯も亦豪傑なる哉之を見ることを或者は神の如く或者は鬼の如くす著者此世界主義的博愛的絶對愛他的極端非戰的偉人物を四方八面より縱横論評し玲瓏玻璃屋に住する如し其燼妍得失一日瞭然眞理の爲に之を論ず豈唯敵國の偉人として之を評騭する而已ならんや◎讀書子愛讀の榮を賜へ

海老名彈正先生著

再版 基督教本義

上製六十五錢 郵税十錢
並製五十五錢 郵税八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放てる豫言者牧師教祖の抱懷せる思想經驗に依らざるはなし本書は基督教界の明星海老名彈正先生卓拔の識勇健の筆を以て上はモーゼより下ルーテル、シユライエルマツヘルに到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教の本義を説明せられたるもの也幸に愛讀の榮を賜へ

齋木仙醉先生譯

トルストイ教訓小説集

定價金參拾錢 郵税金四錢

トルストイの宗教論や、人作小説や、洵に是れ雄渾なる革命の聲也、凄壯なる大煩悶の聲也、思ふに渠が現世界の最大文豪たる所以蓋し茲にあらん、然れども人は狂瀾怒濤を壯とすると共に、湛然一碧の湖水を樂しまざるべからず。深林巨巖を賞すると共に、鳴禽野花を愛せざるべからず。本書は即ち後種の渴望を充たす處の光明の書也。讀者若し之を繙かば、鬢髮雪の如き老文豪が、如何に諄々として、天使の如き聲を以て、博愛、自然、自由、勞働の大々的福音を鼓吹するかを視ん。

苦學社社輯

苦學の伴侶

定價參拾錢 郵税四錢

生活の道に往き艱める苦學生は此の書を讀め此の中に安慰と光明とを得ん堂々たる我國現時の諸大家の成功の秘訣を知らんとする者は此の書を讀め此の中に諒々たる師父の謦咳に接することを得ん嗚呼苦學嗚呼苦學古今誰か苦學せずして成功したる者やある苟も學生にして苦學の心得なき者は忠實なる學生と謂ふこと能はず然れば此の書は學事に志せる總ての青年男女の好伴侶たりと謂ふべし請ふ一本を座右に供せられんことを

海老名彈正先生著

人道

定價拾錢 郵税貳錢

先生時局に關し大に感慨するところあり豫言者的熱誠を傾盡して雄渾壯大萬丈の光焰を吐き以て日露戰爭の意義を高め國民の元氣を鼓舞作振せんと欲す啻に軍國々民の必讀書たるのみならず軍隊慰問用の好冊子なり廣く世上の需要に應せんとす幸に陸續御注文を賜へ

加藤直士譯

トルストイの日露戰爭觀

定價金參拾錢 郵税金四錢

露國の巨人トルストイ伯が今回の日露戰爭に關して如何なる意見を抱きつゝあるかは何人も知らんと欲する所なり然るに伯は倫敦タイムスに於て「日露戰爭觀」と題する一大論文を掲げて最も雄渾痛切に其詳細なる意見を發表したり今や邦人鶴首して其内容の全斑を知らんと欲する時に際しトル翁紹介者を以て有名なる加藤先生に請ふて其全篇を譯述して刻下の讀書界の饑渴を癒さんと欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

横山筆助著

再版 成功したる催眠暗示術 應用自在

定價參拾錢 郵税四錢

近時催眠術の書物多々出版せらるゝと雖ども大抵不充分なる譯書、實際に益なき空論的なるものゝみ多し、之に反して本書は經驗に經驗を積みたる斯學の老練家が、最新の學理と諸種の方法とを參考して何人にも理解し得るやう又極めて懇切に述べられたるものなり、且つ加ふるに興味ある實驗書を以てす、本書出でゝ、我が催眠術界の知識すること必ず大ならん、好學の諸君御愛讀あらんことを

茅原華山編纂

我と人

定價貳拾錢 郵税六錢

本書は世間の好評を博したる『向上の一路』生命一體篇を別冊と爲したるものにして萬朝報の黑岩先生を始め諸家の談論文章を筆錄したるものなり、柳は綠花は紅、是書を讀めば諸名家と共に一堂春風の中に座するの感あるべし

鈴木秋子女史著

軍國の婦人

定價廿八錢
郵稅四錢

戰爭の裏面に婦人あり戰爭は男子のみにてなすものと云ふものは未だ以て今日の時局を語るべからず本書は實に婦人戰時に於てなすべき活動の方法及び戰爭と婦人との天職を說きたるものにして事勢に適切なる事は勿論苟も婦人にして自己の修養發達を力むるものは必ず一讀せざるべからざるの書也

基督教講壇集

定價七十錢
郵稅八錢

本書は眞に生命の麵麭靈活の根原たる現代基督教界のあらゆる大家の說教を網羅揭載したる雜誌講壇の全部を合し改冊せしものなり居ながら各大家の口演を聽問する好冊子其內容に於ては活水如湧の感あり乞ふ愛讀の榮を給へ

新刊

日本名家手簡

杉山先生書簡　黑澤辰三郎編

定價金參拾錢
郵稅金六錢

世に立つて事をなさんとするもの先づ書翰文に熟達せざるべからず書翰文に熟達せんと欲するもの先づ先輩の往復文を研めざるべからず、是れ本書の出る所以なり本書收むる所我國大家の模範文に附するに各其小傳を以てし並に書簡文の變遷を明にす、苟くも當世の活舞臺に雄飛せんとするものは男女を論せず一讀せざるべからず